

<個別研究>

父 性 意 識 に つ い て

— 夫立合い分娩の経験の有無と父性意識 —

研究第1部 千賀 悠子

I はじめに

都市社会において、夫が妻の妊娠中・出産後に、夫・父親としての意識・行動にどのような特徴がみられるかを調べる。今回は、『夫立合い分娩』の希望・経験の有無で意識や行動などに違いがみられるか検討する。

これらの結果より得られた情報により、夫を含めた家族に対するこれからの母子保健サービスなどを今日的に考える一助とする。

II 方 法

妻の出産前（妊娠30週前後）と出産後1カ月～2カ月時に質問紙法による調査を実施。出産前調査時に交流分析のエゴグラムを実施

III 対 象

東京・愛育病院で出産予定の産婦の夫。通院中の産婦に調査票等を渡し、次回通院時に持参するように依頼。後述する夫立合い分娩希望者の場合には、夫が立合いのための面接に来院した時に依頼。出産後の調査は郵送調査。

IV 調査期間

1984年11月～1985年6月末

V 調査内容

1. 出産前・後に実施したアンケート調査(1)
 - (1) 子どもに対する関心
 - (2) 子どもに対する考え方・育て方
 - (3) 妻に対する配慮
 - (4) 夫の意識・行動など（立合いに対する考え方も含む）

2. 出産前のアンケート調査(2)

対象者の生育環境など

3. 交流分析—エゴグラム

VI 結 果

1. 対象数と比較の方法について（表1）

妻の妊娠中に『夫立合い分娩』を希望し、実際に立合いをした夫を『立合い群』とした。また、妻の妊娠中に夫立合い分娩を希望せず、かつ立合いをしなかった夫を

表 1

調査時期	対象群 立合い希望者 初・経産別	立 合 い 群					非立合い群	計
		夫 が (H群)	夫婦で (H&W群)	妻 が (W群)	N. A.	小 計		
出 産 前	初 産	17例	39	16	2	74	56	130
	経 産	1	12	5	0	18	41	59
	計	18	51	21	2	92	97	189
出 産 後	初 産	11	11	30	2	54	46	100
	経 産	1	4	8	0	13	23	36
	計	12	15	38	2	67	69	136

『非立合い群』とした。なお、立合いを希望していても実際に立合いをしなかった例などは、集計対象から除外した。

全対象数等は表1にみるように、出産前の調査では189例で、この189例を出産後の調査対象とし、回答が得られたのは136例。

対象を『初経産別』に『立合いの有無』で比較した。また、立合い希望のイニシヤチブが夫婦のいずれであったかにより、夫から希望した場合は＜夫が、H群＞、夫婦で希望した場合は＜夫婦で、H & W群＞、妻から希望した場合は＜妻が、W群＞の3群に分けて、比較検討をした項目もある。(なお、この分類の場合、初経産別の差異がなかったことと例数が少ないので初経産一緒に検討)

出産前のアンケート調査(2)の対象の生育環境の結果を主に報告する。

2. 出産前の調査

(1) 対象の背景

a 夫婦の年齢

初産の夫の平均年齢は、『立合い群』- 31.6歳・『非立合い群』- 31.4歳。経産の平均31.6歳・34.5歳。

初産の妻の平均年齢は、『立合い群』- 28.8歳・『非立合い群』- 28.4歳。経産の平均は各々29.1歳・32.0歳。

初産では分布にも両群間に差はなく、類似した傾向である。しかし経産では、夫婦ともに『立合い群』の方が平均年齢は低い傾向がある。また、後述する結婚年齢も『経産-立合い群』では短い。この群は他群に比べ結婚年齢が早く、結婚年数が短いうちに子どもを2人望む傾向が推察される。

b 結婚年数

結婚年数を4年未満と5年以上の2群に分けると、初産『立合い群』では5年以上の割合が17%で、対象群4%に比べ危険率5%水準の有意差があった。平均結婚年

数は『立合い群』2.3年・『非立合い群』1.3年で5%水準有意差があった。

経産『立合い群』では4年未満の割合が82%、対象群48%で5%水準の有意差があった。

c 世帯構成

初・経産と両群間に差はないが、三世代家族の割合は『立合い群』8%・『非立合い群』17%で、『非立合い群』の方がやや多い傾向がある。

d 職業

妻の職業の有無は、初・経産とも両群間に差はないが、有職者の割合は『立合い群』の方が高い傾向がある。夫の職業の内容は多様である。資格を必要とする技術者などの割合が『立合い群』16%あり、専門的職業に従事している人が多い傾向がある。

e 学歴

高校卒-『立合い群』13%『非立合い群』4%、大学卒-『立合い群』58%『非立合い群』71%、大学院卒-『立合い群』13%『非立合い群』6%で、どちらの群が高学歴の傾向があるとはいえない。『立合い群』の学歴にはバラツキがある。

(2) アンケート調査(1)の結果(図1・2表2.3.参照)

立合い分娩を希望するか否かで、子どもに対する関心・子どもに対する考え方・妻に対する配慮・夫の考えや行動の変化などに、どのような特徴があるのか検討した。

調査結果からは、両群ともに類似した意識・行動がうかがえる。『立合い群』では、妻の妊娠中から妊娠・出産などに関する情報の収集に積極的ではなかった人や、妻に対する精神的配慮・子どもに対する関心などが低い人の割合が『非立合い群』に比べ少ない傾向がある。

新しい家族のスタートにあたって(子どもが誕生し)、夫が『出産』に対しどの程度の積極的態度を持って臨んでいるかをみるために、＜初めに誰が立合い分娩を希望したか＞という質問を設定した。前述したの3群間

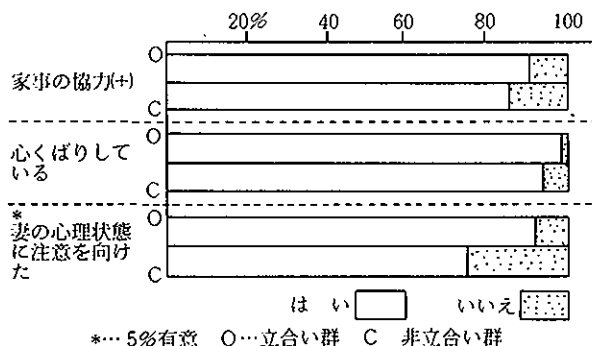


図1 妊娠中の妻に対する配慮(初産)

千賀：父性意識について

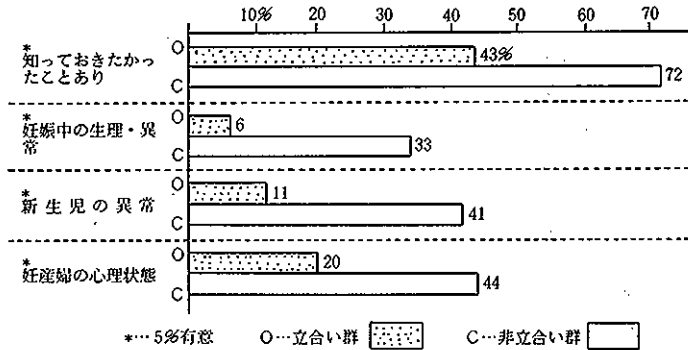


図2 妊娠中に知っておきたかったこと（出産後—初産）

表2 子どもへの関心など（出産後）

	夫 立 合 い 群				非立合 い 群
	自分で 希 望	夫婦で 希 望	妻 希 望	が 望	
育児一話しあい(-)	0%	13	13		7
赤ちゃんの世話し(-)	0	6	7		3
あやす・抱く(-)	0	6	10		17

表3 立合いの希望別にみた、妻への配慮など（出産後）

	夫 立 合 い 群				非立合 い 群
	自分で 希 望	夫婦で 希 望	妻 希 望	が 望	
妻の感情の変化に 気づかない	0%	6	7		6
妻に心くばりを していない	8	6	18		17
立合分娩を妻が 評価していない	0	6	13		/

で比較をすると、同じ立合い分娩希望といっても、夫の意識や行動に微妙な差異が認められた。

『夫が最初に立合いを希望した』=H群では、妻に対する配慮や子どもに対する働きかけなど他群に比べより主体的・積極的であることが示唆された。『妻が希望した』=W群の意識や行動は、『非立合い群』に類似しており、妻や子どもに対する関心などがやや低い傾向がある。

＜立合いに対する考え方について＞

『非立合い群』の立合いを希望しない理由は、＜医師や専門家にまかせるのがよい＞—初産32%・経産44%、＜男

性は立合うものではない＞—初産13%・経産2%、＜何をしていいかわからない＞—初産9%・経産7%、＜怖い＞—初産7%・経産15%、＜立合いの意義がわからない＞—初産5%・経産7%。

『立合い群』の＜立合う理由・動機＞

＜妻の支えになりたい・出産には夫婦で望むことがよい・我子の生れる姿を見たい＞などの動機が、初産・経産66%である。妻が望むのであるという理由の人は、初産—22%・経産33%である。

＜仕事上・子どもの世話など＞で立合えない人は、—初産7%・経産12%で、立合わない・立合えない理由は社会的制約によるものは少ないといえる。立合いをする動機の背景には考え方の違いもあることが推察される。

3. アンケート調査(2)の結果

—生育環境などの調査—

人の意識や行動を理解するには、国の歴史的・文化的背景を考慮し、また、個人のレベルではその人の育った環境などを知ることにより多くの示唆を得ることができる。この意味において、特に対象者の父親に焦点をあて生育環境などについて調査した。

第1に生育環境に関しては、子ども時代の親との葛藤からくる未解決の問題が存在しているかということに焦点をあてた。対象の多くは、＜信頼しあった両親から愛情を持って育てられ、よき子ども時代の思い出をもっている＞と回答。質問紙法のこともありタテマエ的な結果であった。

第2に、対象者とその父親の関係をみたが、ここでは次の4視点から検討した結果を報告する。

(1) 対象者の父親の時代背景

対象者189例の平均年齢は32歳で、その父親達の生まれた年代は、明治12%・大正61%・昭和21%。

大正および昭和—桁生まれの父親達の思春期・青年時代は、第二次大戦中であつたこと、また、彼らの多くの

30～40代は（対象者達が小学生の頃）、日本の高度経済成長時代であったことなどを考慮すると、＜戦前の一家に君臨する父親のように家庭に存在する＞ことはかなり稀薄であり、家庭や家族のことを返りみる余裕がなかなかなかったのではないかと、これまでの報告からも推察できる。

対象者達の父親の印象についての自由記載によると、＜真面目＞＜よく働く＞＜一所懸命＞などの言葉がよく使われている。このような時代を背景にもつ父親にたいし、対象者はどのように男性としてあるいは父親としてのアイデンティティを確立してきたのかを、次の(2)～(4)の視点を持って検討した。

(2) 『父親の性格をどのようにとらえているか』

対象全体では＜厳しい＞＜やさしい＞ともに35%。立合いの有無で差はないが、立合いの希望別ではH群では父親が＜厳しい＞性格だったとする人が50%、H&W群では＜やさしい＞とする人が49%。（表4、5%水準で有意）

表4 お父様は、どのような方でしたか？

	夫 立 合 い 群				非立合 い 群
	夫 希	が 望	夫婦で 希 望	妻 が 望	
厳 しい	*50%		29	39	31
明 る い	6		19	16	16
やさしい	22		*49	31	37

(※5%有意)

また、W群は非立合い群とその傾向が類似している。

(3) 『父親の対象者に対する関わり方』

対象全体で第1位＜自主性を大事にしてくれた＞35%、第2位＜厳しく育てられた＞24%、第3位＜受容的であったかだった＞23%。立合いの希望別でみると（表5）、H群では＜厳しく育てられた＞44%で他群に比べ多い傾向が認められる。これは前述した父親の性格の結果と対応している。

(4) 『現在、父親のことをどのように思っているか』

父親に対するアイデンティティの確立を知り、対象者の父親像を把握する目的で、対象者が父親のことをどのように思っているか16項目からなる父親の像について5段階評価を試みた（図3）。

対象全体の父親に対する得点はほとんどの項目でプラスで両群間に差は認められない。立合い群では、＜相談相手であったか＞＜指導者だったか＞という項目ではマイナスの得点であった。この傾向を検討するため、アンケ

表5 お父様は、小さい頃のあなたにどのようにかかわっていましたか？

	夫 立 合 い 群				非立合 い 群
	夫 希	が 望	夫婦で 希 望	妻 が 望	
厳 格 的 支 配	*44%		19	16	26
保 護 的 受 容	11		33	24	22
自 主 性 重 視	28		33	35	36

(※5%有意)

ート調査(1)の結果より、主体性があると示唆されたH群と非立合群とを比較検討した。

H群では、＜相談相手であったか＞＜指導者だったか＞＜理想の人であったか＞＜父のような父親になりたいか＞という項目がマイナス得点だが、非立合群ではプラス得点。しかし、＜勇気があった＞＜男性らしさがあった＞という項目では、H群の得点が非立合群に比べやや高い傾向がある。また、＜遠い存在を感じていたか＞という項目では、H群のほうが遠いという得点がやや高い傾向を示した。（※印は5%水準で有意）

夫立合のH群の『父親に対する評価』で、＜勇気があった＞＜男性らしさがあった＞という評価などや、また前述した妻や子どもに対する積極的な関わりなどから、この『父親』に対するマイナス得点について検討すると、H群の父親としてのアイデンティティを形成する要因の一つとして、父親のある部分を反面教師としてきたのではないだろうか。また、父親が＜厳格だった＞ということもその子ども（対象者）の主体性・積極性のある人生態度を形成する要因の一つではないかと推察する。

非立合群の『立合わない理由』として、＜出産は母親の仕事＞＜男子禁制の域＞＜出産は妻の義務である＞などいわゆる社会通念・慣習の見方をあげた人が46%いたこと、この群では男児を希望する割合が高いこと、そして父親に対する評価にマイナス得点を与えた項目がなかったことなどを考慮すると、非立合群の特徴として、自分の父親の考え方・父親像をそのまま踏襲していくという価値感を持っているのではないかと推察される。

4. エゴグラムの結果

自我状態のバランスなどをみる尺度として使われている交流分析のエゴグラムの結果を（図4）に示す。

立合い群は非立合群に比べ、＜理想的態度＞などをあらわす成人の自我状態(A)がやや高く、＜順応的態度＞

千賀：父性意識について

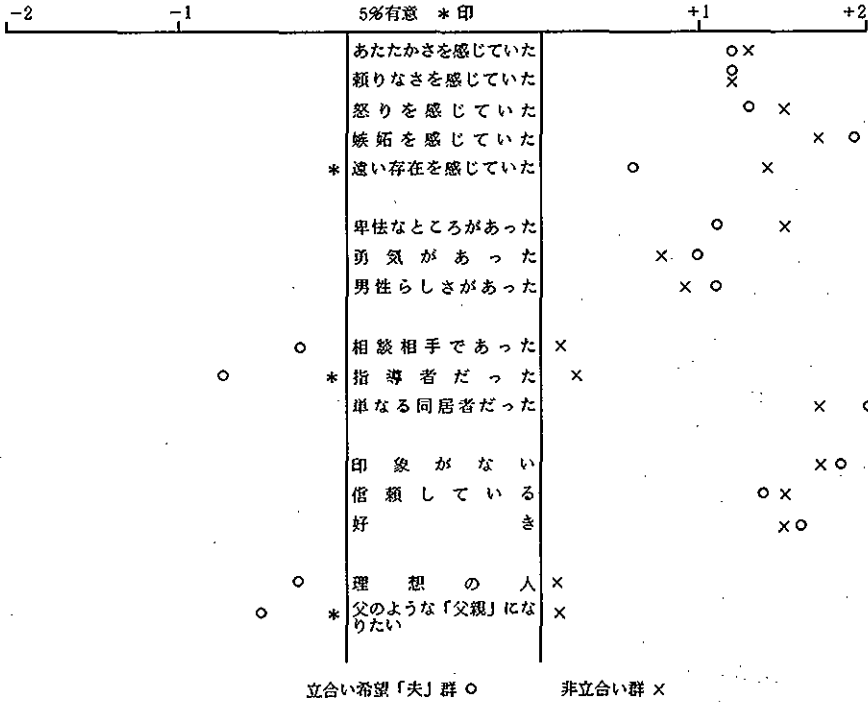


図3 父のことをどのように思っているか(妊娠中)

表4-①

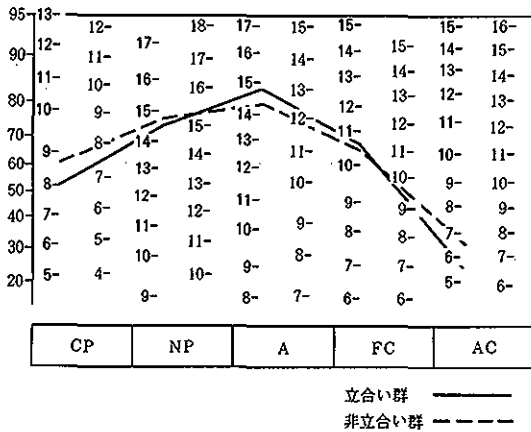
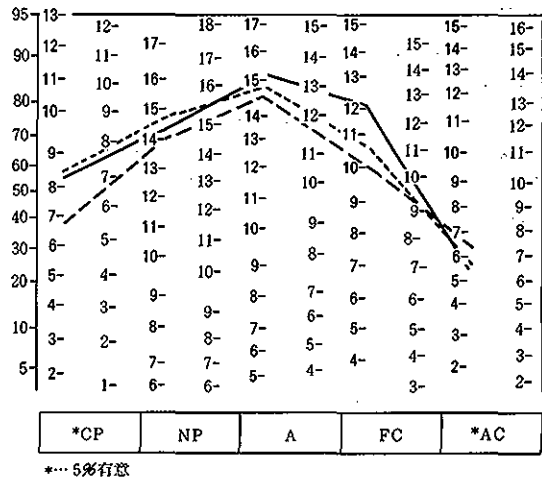


表4-②



などをあらわす子どもの自我状態（AC）が低い傾向があり、他人の言動に左右されたり、自分の意思・考えを押し殺すことなく、自分と環境を大切にす人生態度が交流分析の理論より推察される。特に、H群においてはその傾向が強い。

立合い分娩を経験したが＜よい印象はなく、次回は立合いたくない＞という人は6名いたが、この群の特徴は、妻の希望で立合ったのが5名。また、エゴグラムでは、自我状態のバランスが悪く、支配的・厳格をあらわすNPが際って高く、やさしさやおもいやりをあらわすNPが著しく低いのが3例。本能的で我儘な面をあらわすFCが際だって高いのが1例、順応性をあらわすACが際だって低いのが1例、支配的・厳格のCPとやさしさやおもいやりをあらわすNPの両方が低いのが1例。

交流分析で自我状態のバランスが悪いということは、他者とのコミュニケーションがうまくいかない傾向を示すことが多い。この群の立合いの経験があまりよくなかったということに関する記述でも、＜妻に援助するにあたって上手なコミュニケーションがとれず、どのように援助してよいかわからなかった＞・＜状況に対する判断力・理解・適応・なども十分でなかった＞ことや、＜自分が想像していた通りに、あるいは期待どおりに分娩が進行しなかったことによる不満がある＞など述べられており、このことは前述のエゴグラムの結果の評価 ほぼ対応している。

5. まとめ

夫立合い分娩の希望の有無によって夫・父親としての意識や行動などにどのような特徴などがあるのかを検討した。また、意識や行動を形成するのに影響を及ぼすと考えられる生育環境とくに対象者の父親のことについて検討した。

(1) 両群の夫達の多くは、妊娠中・出産後の妻に対して心身両面にわたってよく援助しており、また子どものことにも関心をもち世話もよくみていることが推察された。立合い群では対照群に比べやや積極的な行動がみえる。立合い群の結婚年数が対照群に比べ有意な差があることから、出産を心待ちにし子どもにたいする期待などが高いことなどもその理由と考えられる。

(2) 特に、自らが立合いを希望するH群では、他の群に比べ自分の価値観・考えなどが明確になっており、夫・父親としての意識や行動に積極性が認められる。

(3) 対象者自身の父親としてのアイデンティティーを形成する要因として、父親から＜勇気＞＜男性らしさ＞を感じていたかどうか、そして父親の養育態度に＜厳格さ＞があったかということが考えられる。

なお、父親としてのアイデンティティーを形成する要因などの検討、およびエゴグラムとの関係などについては、今後の課題とする。

(4) エゴグラムの活用により対象者の自我状態のバランスを把握することができるので、対象者に対して効果的援助の仕方などが工夫できることが示唆された。

保健指導の対象者のニーズが多様化していく今日、対象者である夫・父親がどのような共通した意識や行動を持っているのか、あるいはどのような個別性があるのかを把握し、指導に反映させることが今日的に大切であることが示唆された。

稿を終るにあたり、研究にご協力いただきました研究第1部長堀口貞夫先生・愛育病院森恵美助産婦はじめスタッフ一同、及び賛育会病院助産婦学校6回生原瀬佐夜子氏他に感謝します。